シンポジウム 「感性的コミュニケーションとしての舞踊」

報告

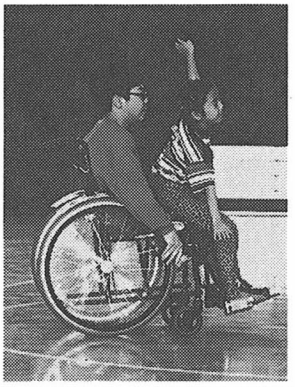
インクルーシヴなダンスにおけるコミュニケーション

西　洋子

第54回学会大会のシンポジウムでは，主にVTRの映像を通して，インクルーシヴなダンス活動の実践報告を行った。本稿では，表現の多様な個性を“包み込む”インクルーシヴなダンスの現場とそこでのコミュニケーションの特性を簡単に紹介していきたい。

1．インクルーシヴなダンスの現場（フィールド）

筆者らは，1998年から「みんなのダンスフィールド」(Inclusive Field for Dance) という活動を，地域社会のなかで進めている。この活動をはじめたそもそものきっかけは,『からだや動きで表現するために』(ジエムコ出版，1998) という教育ビデオの制作であった。障害のある人たちをも含めた身体表現活動の目的や内容・方法等を紹介するビデオ制作プロジェクトに際して，車いすの子ども３名と車いすではない子ども３名が初めて出会い，約３ヶ月の間，週に１～２回程度の定期的な身体表現活動を継続することになったのである。

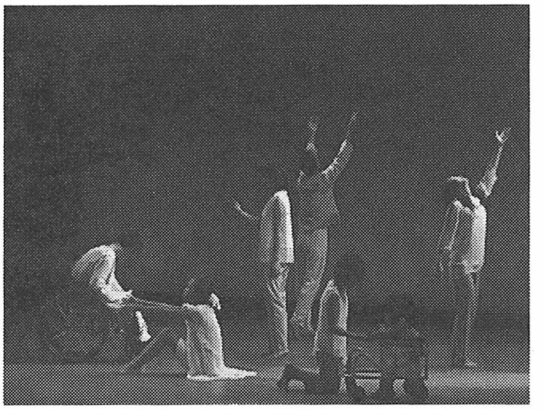


『キャンディ・レイン』1998
空想の世界を飛ぶ親子鳥（上）と
不思議なヘビ（下）

この間，プロジェクトを企画・実施した筆者らは，子どもたちの活動を教育的に支援しながら，彼らが協同でつくりあげた作品をパフォーマンスで発表するまでの成果や問題点を追っていったわけである。

活動を開始した当初，子どもたちはお互いのさまざまな差異に強い戸惑いや不安感を抱いた。しかしながら一方では，身体による創造的な体験を共有することによって，相互の関係性やそこから生まれる表現を少しずつ，そして確実に，変化させていったのである。

こうして６名の子どもたちからはじまった活動は，約５年を経た現在，幼稚園児から高校生までの多様な個性をもつ子どもたちとその家族，ボランティア，さまざまな領域の教育・研究者ら総勢60名以上が集う現場となった。そして，定期的な活動はもとより，活動の意義や問題点を整理しながら，社会へと向けたパフォーマンスやワーク



『フィールド2002　～雪は降り，春は訪れる～』2002

ショップ等の試みを継続している次第である。

さて，「みんなのダンスフィールド」の英文名にある“インクルーシヴ”とは，「全てを包み込むような」という意味である。この言葉は，1994年にユネスコのサラマンカ宣言より教育界で国際的にクローズアップされるようになったインクルージョン（Inclusion），あるいはインクルーシヴ・エデュケーション（Inclusive Education）と方向性を同じくするものであることはいうまでもない。「みんなのダンスフィールド」のテーマは，インクルージョンという教育理念を社会のなかへと広げていくこと，つまり，学校教育の場を離れた地域社会のなかで，自由な身体表現を楽しみたいと思う“みんな”とともに，より広がりのあるインクルージョンを醸成していくことである。したがって，ここでインクルーシヴされるものは，障害の有無はもとより，性や年齢，活動経験や技術の差といった活動者のさまざまな特性の全てを指し示すことになる。繰り返しにはなるが，インクルーシヴなダンスの現場には，障害のある人もない人も，子どもも大人も，女性も男性も，ダンスの上手な人もはじめての人もいて，これらの人々が“みんな”で差異を包み込みながら，なおかつその差異によって，各々の個性を際立たせる新鮮な身体表現をつくりだす楽しさと，そのような新しい表現活動をコアに“みんな”で共に成長する活動のあり方そのものを模索する，そんなプロセスの共有が目指されるのである。

2．インクルーシヴなダンスにおけるコミュニケーションの特性

それでは，このようなインクルーシヴなダンスの現場でのコミュニケーションには，どのような特性がみられるのであろうか。

舞踊や身体表現活動でのコミュニケーションに関する知見はさまざまであるが，この問題に関するこれまでの議論や実証研究は，創作者や演者の意図やイメージが動きを介して鑑賞者にどのように伝わっていくのかといった人と人とのあいだの

非言語的な伝達，つまりは“ノンバーバルなコミュニケーション”に力点を置くものであったと思われる。一方で，インクルーシヴなダンスの現場に自分自身が身をおき，そこでの活動者の様子や相互のかかわりを目にして実感するのは，“自己”と“さまざま他者”とが出会い，ともに表現をつくりあげていく活動では，特に身体相互による“インタラクティヴなコミュニケーション”が生成・活性化するということである。この場合の“インタラクティヴ”とは，一般的なコミュニケーション理論で語られるような，情報の送受信が時系列にそって順次出現する“双方向性”に力点を置くというよりもむしろ，“互いに影響し合う関係性”が同時的に進行する，いわば“響きあい”の状況を指し示すことになる。そして，この“響きあい”という状況が，言葉によるコミュニケーションではなく，身体によるコミュニケーションの大きな特徴である点は，いまさら言及するまでもないことであろう。

そもそもひとが行うコミュニケーションの目的には，確かな情報の“伝達”を中心とする理性的な側面と，共振や共感によって他者との一体感をつくりだす“共有”を目指す感性的な側面の２つが混在するとされている。このうち，インクルーシヴなダンスの現場では，自己と他者とがさまざまな差異を超えて，表現の共有を目指す感性的なコミュニケーションが深く編まれていくわけである。その場合，冒頭で紹介した６名の子どもたちに顕著であったように，活動当初には強い戸惑い

や不安，ズレの実感が強く表れる場合が多い。しかしながら，身体を介して動きや感情の“送る～受ける”をさまざまに試みるプロセスによって，身体による“インタラクティヴなコミュニケーション”は次第に活性化し，やがて間身体的な感覚や間主観的な感覚が芽生え，相互の関係性が深まっていく方向性が認められるのである。 筆者らはこのプロセスに着目し,250名のさまざまな活動者を対象とする横断的調査によって「身体表現活動における共振の発現プロセス」を推定する実証的な研究を行った（図１）。加えて，同じ問題意識に基づく縦断的な研究と，具体的な事例を扱う質的な研究を進めた。それらの結果は，身体表現活動におけるインタラクティヴなコミュニケーションで構築される関係性を基盤に，自己の発達が促進されることを示唆するものであった。

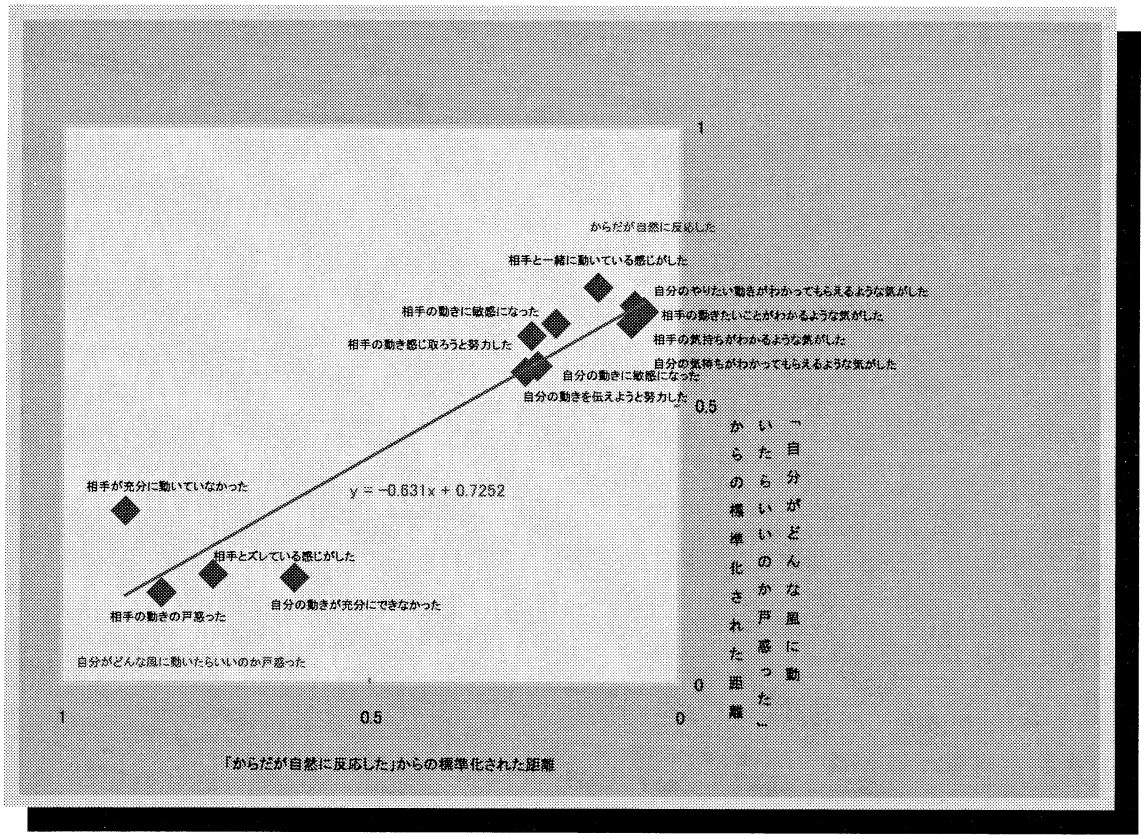


図１．身体表現活動における共振の発現プロセス
（西・野口・柴2001）